



捨てられ  
従魔と  
ゆる暮らし



SUTERARE  
JUMA TO  
YURUGURASHI

[ 著 ] KUZUME

[ illust ] 満水

3



# MAIN CHARACTERS

## 主な登場人物



**クキ**

ルルビ村に突如現れた謎の女。ツバキと何やら因縁があるようだが……？



**シロ**

クキの従魔。  
サザンカに姿が似ている。



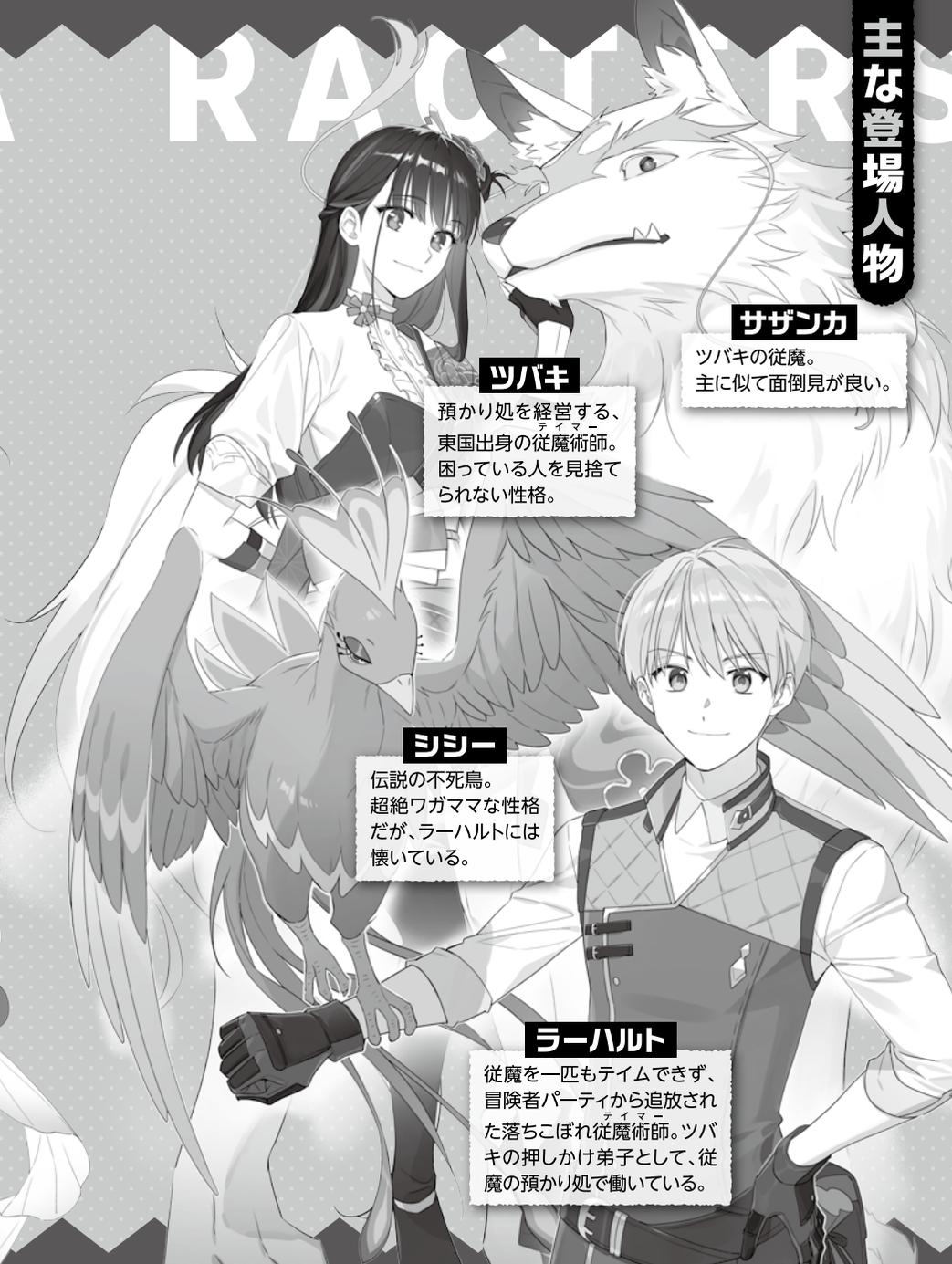
**デュポン**

ナルシストなドリアド。  
ツバキのことをヴィーナズと呼ぶ。



**エレナ**

預かり処に棲みついた  
ダウナー系人魚。



**ツバキ**

預かり処を経営する、  
東国出身の<sup>ティマール</sup>従魔術師。  
困っている人を見捨てられない性格。

**サザンカ**

ツバキの従魔。  
主に似て面倒見が良い。

**シシー**

伝説の不死鳥。  
超絶ワガママな性格  
だが、ラーハルトには  
懐いている。

**ラーハルト**

従魔を一匹もタイムできず、  
冒険者パーティから追放され  
た落ちこぼれ<sup>ティマール</sup>従魔術師。ツバキの  
押しかけ弟子として、従魔の  
預かり処で働いている。

## プロローグ

夏の暑さが過ぎ去り、秋の気配を感じ始めたルルビ村の端っこ。

従魔達は来たる冬に備えるために、段々とその頬をふくよかにしている。

それは人間達も例外ではなく。

「ラーハルトー！ こっちは準備万端だよー！」

そう大声で叫んだ預かり処の主——ツバキは、庭から従魔達が集めてきた色とりどりの落ち葉を  
せつせと山にする。

ツバキの従魔であるサザンカは、その様子を見て口を開いた。

『もう落ち葉は集めてこなくていいのか？』

「うん！ ラーハルトがアレを持ってきてくれるから。そうしたら楽しい、でも苦しい忍耐の時  
間……っ」

『忍耐？』

サザンカがツバキの言葉を聞いて頭の上にハテナを浮かべていると、両手いっぱい何かを抱えたラーハルトが預かり処の縁側から庭へ駆けてくる。

「おまちどおさます！ ツバキ師匠、こつちも準備万端ですつ！」

はいっ！ と元氣よくラーハルトが差し出したのは、アルミで一つ一つ丁寧に包まれた、憎いあんちきしよう。

そう、焼き芋である。

「秋といえば、食欲の秋！ そして食欲の秋といえば、ホクホク焼き芋だよね」

ラーハルトから芋を受け取ったツバキは、るんるんとそれらを落ち葉の山の中に仕込んでいく。

そして、ちょうど鍛冶師のアリオスから一時預かりを頼まれていた炎馬、ジョゼフィーヌを呼び寄せると、その火の粉をちよこつと分けてもらう。

『ん？ 炎じゃったら妾も分け与えてやらんこともないぞ！』

どこからか飛んできた不死鳥のシシーの言葉に、ツバキはげんなりした顔をする。

「あ、いい、いい。不死鳥だと落ち葉も芋も全て燃えカスになるから」

『んん？ 燃やすんじゃないのかや？』

「ちつ、違う違う！ シシー、これは焼き芋について、調理の一つなんだよ。食べ物を作ってるの！」

ぼぼぼつ、と羽根先に炎の塊を作り出したシシーを、ラーハルトが慌てて止める。

『みやあ〜つ！ みやみやみやつ！』

『にやお〜ん……つ』

「おつと、あんた達あんまり近づいたら危ないわよ」

いつの間にか、美味しい匂いに釣られて、毛玉猫達が落ち葉の山をつんつんと尻尾でつついてくる。

それらをやんわりと箸めつつ、ツバキ自身もじゅるりと口内で溢れる涎を堪える。

『……ちよつと、煙たいんだけど』

「あつ、ごめんね、エレーナ！ 風向きが……」

風下にあるプールから、ざばりと人魚のエレーナが顔をしかめて出てくる。

ラーハルトがどうしよう、でも風向きはな……と対応を考えていると。

なぜか普通にその場にいたエレーナの元契約主——ジェームズが、「自分が煙除けになるからあ！」と、エレーナの前で自身のジャケットをばっさばっさと団扇のように扇いで煙の行く先を変えようとしている。

「……ほつとこ」

「……ほ」

ラーハルトはツバキに倣<sup>なま</sup>って、落ち葉の山の前に座り込み、じっとそれを見つめる。焼き芋ができたら、今ここに集まっていない従魔達にもおやつとして持っていこう。預かり処は、今日も楽しく、平和だ。

## 第一章 居心地のいい場所

焼き芋をした日からしばらくして。

朝一番に預かり処に届いた手紙を読んだツバキは、台所で朝食を作っていたラーハルトに仕事よ、と告げた。

「はあ……俺に指名依頼、ですか？」

「うん」

「師匠じゃなくて、わざわざ俺を指名って……うわっ！ 焼けすぎちゃう焼けすぎちゃうっ！」  
ラーハルトはフライパンに広げていた卵の端を慎重に返すと、形を整えて皿に載せる。

「よしっ、ぎりふわとろオムライスだっ！」

ちようどいいふわふわ加減をキープできたことに満足して、指名依頼のことが頭から飛んでいったらしきラーハルトに、ツバキははあ、とため息を吐く。

「ちよっと、ラーハルト！」

「え？ あっ、すみません！」

「……もういいわ、まずは朝食にしよう。それからちゃんと集中して依頼内容を確認して」  
「はい」

ツバキは既に出来上がっている朝食を、台所から居間の机へと運んでいく。  
ラーハルトは、追加の卵をコンコンと小気味よい音を立てて割った。

かちゃん、と音を立てて、ラーハルトは綺麗に空になった皿を机に置く。

「ごちそうさまでしたあ」

盛りに盛られていた朝食は、すっかり二人のお腹の中に消えた。

従魔の世話は体力勝負であるために、栄養、カロリー共に満点の朝食は欠かせない。

食休みをしたら、まずは庭の掃除からだ、とラーハルトが熱いお茶をすすっていると、ツバキがラーハルトの目の前に手紙を差し出す。

「へあっ？」

「ラーハルトあんだ、忘れてるでしょ。指名依頼」

「あ」

段々と預かり処の認知度は上がり、また着実に実績も増えてきている。

そのため、以前のように玄関先に従魔を放置していくような輩は減り、きちんとルールに則つて

従魔を預ける人や引き取る人が増えてきた。

中には事前に預け依頼の連絡をくれる人もいる。

しかし、それらは大体がツバキ宛の依頼であるため、わざわざラーハルトを指名してくるのは珍しい。  
しい。

「俺だけですか？ 師匠も一緒に？」

「ラーハルトだけ」

ラーハルトは受け取った手紙を開けると、中身を読む。

預かり処さま

怪我をしている鳥型の魔物を保護したが、自分は従魔術師ではないため預けたい。

しかしその魔物を安全に運搬する自信がないので、申し訳ないが引き取りに来てほしい。

また、同じ鳥型の従魔を連れてくるという、ラーハルト氏に今回の仕事を引き受けてほしい。  
保護した魔物は雛らしく、同じ鳥型の魔物がいた方が安心するんじゃないかと期待している。

「……はあ」

わざわざ指名してくるとは、どんな依頼なのだろう、とラーハルトはドキドキしていたが、なん

てことはないよくある依頼内容に、気の抜けた声が出る。

「鳥型の魔物ってありますけど、なんの魔物なんですかね？」

「依頼の手紙には書いてないわね。従魔術師じゃないって書いてあるし、単に種類が分からないんじゃない？」

ツバキの言葉に、ラーハルトは納得して頷く。

「確かに、魔物を相手にするような仕事をしてないと分からないかもですね」

「恐らく三つ目鳥か、金剛鳩あたりじゃない？」

「あ、そうですね。手紙を配達している最中に怪我して落ちちゃったとかですかね。そしたら契約者である従魔術師は困っているでしょうね」

三つ目鳥も金剛鳩も、大きさは普通の鳥ほどで大き過ぎず、かつとても賢いために伝書鳥としてタイムされる一般的な魔物だ。

元は人の生息地とは重ならない場所に住んでいるが、大勢の従魔術師がタイムし、繁殖させていることで、近年はタイムされていないものも街中などでよく見かける。

ラーハルトはもう一度手紙に目を通しながら、依頼主の住所を確認する。

「サファイア街……ルルビ村からだちょっと距離がありますね。行きは乗り合い馬車で行けるとしても、帰りは従魔を預かってくるわけですから、乗り合い馬車は使えないですね」

「そしたらグレートウルフに乗ってく？ 荷物を固定できる鞍があつたと思うけど」

ツバキの提案に、ラーハルトは目を瞬かせた。

「いいんですか？」

「怪我してるって書いてあるしね。早いに越したことないわ」

ツバキの提案に、ラーハルトは確かに、と頷く。

「よし、決まりね。じゃあ依頼了承の返事を書いて出してくる。掃除はいいから、あんたは出発の準備をしてて」

「はい、分かりました。あ、朝食の片づけだけしちやいますね」

「ありがとう」

執務室へ行くツバキを見送って、朝食の片づけを終えると、ラーハルトは一度縁側へ出る。

「シシー！ シシー！」

庭で爆弾鼠達に紛れて日向ぼっこをしていたシシーは、ラーハルトの呼びかけにむくりと首だけをもたげた。

『んむう……なんじゃあ〜？』

『ごめーん！ ちょっと来てくれー！』

『ふわあああ……』

シシーは眠気眼<sup>まね</sup>を羽先で器用にこすると、ふらふらとした飛び方で縁側にいるラーハルトのもとまで来て、その肩にのしりと着地する。

「どわっ！」

『修行が足らんのお、妾がいつなんどき、どこに着地してもまったく一ミリも少しもぶれない体幹を鍛えるべきなのじゃ』

「いや、お前が重たいから……」

『……』

ツンツクツンツク、ツンツクツンツク、ツンツクツンツク、ツンツクツンツク!!

「いたいたいっ!! おまつ、不満がある時に無言でつづくのやめろよ!!」

『うるさいうるさいのじゃっ! 乙女に向かつて重たいとはこれいかに! なのじゃ!』

ラーハルトは頭頂部をひたすらつついてくるシシーの首を押さえる。すると、今度は羽をばさばさどばたつかせて暴れ出す。

「わっ、わっ、こける……!」

ドターン! と大きな音を立ててラーハルトは後ろから倒れた。

打ち付けたお尻の痛みに悶えていると、そういえば、とシシーがラーハルトのお腹の上に座ったまま喋り出した。

『なんで妾を呼んでおったのじゃ?』

「……だから、それを伝えようとしているのにお前が邪魔をしてたんだよ」

ラーハルトは大きなため息を吐いた。

怪我をした鳥型の魔物を、保護した人から引き取りに行く、という依頼の内容をシシーに簡単に説明してから、ラーハルトは自室で荷詰めを行っていた。

足の速いグレートウルフに騎乗していくとはいえ、サファイア街は通常ならば往復で四日ほどかかる距離だ。確実に行きは一泊するだろうが、帰りは不明だ。魔物の怪我の具合によってはグレートウルフに頑張ってもらって日帰り強行軍の可能性もある。

とにかく、どのような旅程になっても対応できるように、ある程度の装備は揃えていく必要がある。

「こんなにかつくり装備を揃えて出かけるなんて、学校の卒業後に冒険者パーティーに交ぜてもらって以来だな」

水筒、携帯食料、寝袋、各種薬に念のため応急処置セット。

「あとはお金と、ナイフ……は流石に冒険者じゃなんだし、いいよな」

『妾のブラシも持っていくのじゃっ』

「あー、はいはい」

最後にシシー用のブラシを入れて、ラーハルトはリュックの口をぎゅっと絞る。

『妾は飛んでいけばいいのじゃよな?』

「うん。シシーだったら、グレートウルフの脚にもついてこれるだろ?」

『無論っ! あんな四本脚で地べたを駆けずり回っておる毛玉共（毛玉）に後れを取る妾ではないわっ! わっはっはっ!』

「よし。師匠から、俺の準備ができ次第出発してって言われてるから、行くか!」

従魔とのコミュニケーションは大事だ。おろそかにすべきではない。

ない、が、何事も過ぎたるはなお及ばざるが如し。

シシーが満足するまでシシーのお喋りに付き合っていては、日が暮れるどころか翌日の日が昇る。

ラーハルトはぺらぺら喋り続けているシシーに、時折「凄いね」「わあ」という相槌を打ちつつ、準備をする手も止めない。

そしてさり気なく部屋を出て、玄関まで行く。

「あ、来た来た」

玄関には、グレートウルフに騎乗用の鞍をつけて準備を終えたツバキが立っていた。

「先方には伝書鳥で返事を送っておいたから、ラーハルト達が着く前には届いていると思う」

「ありがとうございます」

「もしも何かトラブルがあったら、シシーをこっちに飛ばして」

「分かりました」

ラーハルトはリュックを背負うと、グレートウルフに騎乗する。

「じゃあ、気をつけてね」

「はいっ! 行ってきます!」

『行ってくるのじゃっ』

そうしてラーハルトは、二度目の単独依頼へと出発した。

グレートウルフに騎乗しての移動は、天気がいいこともあり、とても快適に進んでいった。

途中で一度野宿をしたが、何せ連れているのは屈強なグレートウルフに伝説の不死鳥。他の魔物や盗賊なんかには襲われる心配もなく、なんのトラブルも起きず目的のサファイア街に予定通りに到着した。

「うわあ、久々に他の街に来ると、すっごく都会に来た気がするなあ……」

王都にこそ近くはないものの、観光業で栄えるサファイア街は活気で溢れている。

ラーハルトの住むルルビ村は、始まりの村と言われる通りに主に初心者冒険者達ばかりが訪れる

が、サファイア街は冒険者以外の職業の人々や観光客で賑わっている。

『ほう。何やら美味しそうな匂いがそこかしこからするのじゃ!』

「サファイア街は食べ物物のマーケットがあるから、そこからしてるんじゃないか?」

『ほうほう。では、ご賞味……』

ふらふらと飛んでいこうとしているシシーを、ラーハルトはむんずと捕まえる。

「こちら。急ぐんだから、今回は我慢! また今度連れてきてやるから!」

『なんでじゃー! 妾は早く食べれるのじゃ! すぐなのじゃ!』

「駄目だつてば!! 行くな行くな!!」

通り過ぎる人々が、なんだなんだとラーハルト達を見ていく。

その光景を、グレートウルフは「恥ずかしいなあ……」と言わんばかりにため息を吐いて眺めていた。

どうにかこうにかシシーを宥めすかし、今度また絶対に連れていくという約束を取りつけたラーハルト。しかし、本当はまだ納得がいていないらしく、シシーは腕の中でぶすくれている。シシーの機嫌を取ることも大事だが、今は怪我をしているという魔物の方が気になる。

とにかく素早く魔物を預かり、そして素早く帰ろう、とラーハルトは依頼人の住所を目指して

歩く。

「うーん……大きい街だけあって、中々分りにくいな」

段々周囲は人気ひとけが少なく、道幅も狭くなっていく。観光客向けでない通りはこんなものか、とラーハルトは特に気にすることなく黙々と進んでいく。

若干迷いつつも一時間は歩いたかという頃、ラーハルトはやっと目的地に立っていた。

「はあ〜! ここだ!」

『……食べる時間あったのじゃ』

「いや、お前が飛んでくれてれば迷わずに着いたんだけど……」

『妾が我慢したんだから、ラーハルトも我慢するべきなのじゃ』

「なにが?」

やはりまだまだご機嫌はななめらしい。

これはしばらく引きずるな、と長期戦のご機嫌取りを覚悟してため息を吐くラーハルトだったが、ひとまず今は依頼に集中! と気持ちを入れ替えて依頼人の家の扉を叩く。

「すみませーん! ルルビ村の従魔の預かり処から来ました、ラーハルトです!」

しかし家の中からは反応がない。おかしいな、とラーハルトは今度は更に大きく扉を叩く。

「すみませえええん!! ルルビ村のおお! 従魔の預かり処のおお! ラーハルトでえええ

す!!」

ガンガンガンガンッ!

すると、今後は反応があった。

扉がちやり、と音を立ててゆっくりと開く。

少しずつ開いていく扉の向こう側は暗い。僅かに開いた扉の隙間から、ぬぼおつと見上げるほどの大男が顔を覗かせる。

「ひぎゃっ!!」

いかにも屈強な風貌の男の登場に、「やばい、住所間違えたか!」とラーハルトは飛び上がる。

「ああっ、預かり処さん!」

「すみませんすみません、間違え……え?」

大男はラーハルトの姿を確認すると、ぱつと笑顔を見せた。

「? どうかしましたか?」

「あつ、いえ、いいえ!」

怖い職業の方では、と勘違いしてしまったラーハルトは申し訳なく、その勘違いがばれないように慌てて首を振る。

「あの、怪我をしている鳥型の魔物を保護されたとか」

「ああ、はい。中にいますので、どうぞ上がってください。あ、お連れの従魔も一緒にどうぞ」

「あ、すみません。失礼します」

ラーハルト達は言われた通りに開かれた扉を潜る。

招かれた家の中はカーテンが閉め切られているのか薄暗く、見えづらい。

「あの、それで魔物はどこに……」

ボタン! とラーハルトの背後で扉が閉められる。

ラーハルトが驚いて声を出すよりも早く、グレートウルフが唸り声を上げてどこかへ跳躍する気配がした。

が、グレートウルフの牙が何かにかかるとはなく、ラーハルトの驚いた声が口から出ることもなく、またシシーの羽ばたきがすることもなく、

どざり、と何か重量のあるものが床に倒れ落ちる音がいくつか重なった。

「……効いたか?」

「ああ。問題ない」

薄暗い家の中には、どこからともなく入ってきた煙が充満している。

防毒マスクを被った大男達が倒れ込んでいるラーハルト達に近づくと、ばしばしとその頬を叩いて完全に意識がないことを確認する。

「連れてるのは不死鳥だけつつう話だったが、グレートウルフも一緒とはラッキーだったな」  
「グレートウルフか……一時期は人気が高かったが、今はどうなんだ？」

「流行時には劣るが、一定の人氣はいつもある奴だ。まあ、そこそこの値はつくだろう」  
「よし。とつとと運んじまおう」

「そうだな」

ラーハルト、シシーにグレートウルフを抱えて、大男達は家の奥へと消えていった。

◆

高い天井からシャンデリアが吊るされている。

できる限り抑えられている照明のせいで薄暗いが、まるで豪華なオペラ劇場のようなそこ。  
怪しい仮面を着けた人々が、円形に連なる客席を埋めている。

漂う香水や煙草、アルコールの香りが、人々の気分をいやに高揚させる。

広い会場の前方中央には、一段高いステージ。

「さあ、紳士淑女の皆々様！ お楽しみのお時間がやってきました！」

マイクを片手に仰々しくお辞儀をしてみた男が声を上げれば、会場の熱気は一気に上がる。

「今宵は特別な一夜になることでしよう！ なんと本日は、世にも珍しい逸品が登場する予定です……それも……！」

マイクの男に合わせて楽団が音楽を奏でて盛り上げる。

「灰の中から再び燃え上がる奇跡の命……伝説級の魔物、不死鳥です!!」

ワアアッ!! と人々が歓声を上げた。

◆

ツンツン。

ツンツン、ツンツン。

先端の尖った何かが、硬さのある何かを突いている。

ツンツン、ツンツン。ツンツン、ツンツン。

「……つつ、……んんん……」

ツンツン、ツンツン。ツンツン、ツンツン。ツンツン、ツンツン……

「んんんっ、……んっ!? いたた、いだだだだ!! ……んあ!？」

硬さのある何か、もといラーハルトは跳ね起きた。

『やあ〜っと起きたか』

「えっ、えっ、なに!？」

シシーが自身の嘴を羽先で拭うような仕草をして、はあくやれやれ、とため息を吐く。

「あれっ? つていうか、俺達は何して…あつ! そうだ魔物は!? 怪我した魔物!!」

『何を言っとするのじゃ! それよりも周りをよく見渡してみるのじゃ!』

「え?」

なぜかシシーに一喝されたラーハルトは、言われた通りにぐると周囲を一瞥し、そして再度じっくりと見渡す。

貧相な蝋燭がぼつぼつと数本。一体なんの水だか、天井から滴る水漏れ。カビっぽい空気に、冷たいむき出しの石の感触。そして行く手を遮る鉄格子。

「……えーっと、怪我をしている魔物の飼育部屋?」

『どう見ても牢獄じゃろうがっ!!』

「やっぱり!? え、でも、なんで!？」

ラーハルトとシシー、それにグレートウルフの一人と二匹は、まったく見覚えのない牢の一室に捕らえられているようだった。

「俺達、依頼人に家の中に招かれて、それで……」

『どうやら薬を盛られたようじゃ』

『クウウン……』

とりあえず立ち上がりとしたラーハルトはしかし、それができないことに気づく。

「えっ!？」

ラーハルトの手足には枷がはめられていた。

当然、シシーとグレートウルフにも枷がはめられ、更に枷に繋がる鎖は壁にしっかりと固定されている。

「シシー、ちなみとその鎖を引き千切ったり……」

『妾をどこぞの怪力者と勘違いしておるのか?』

「……グレートウルフは」

『クウウウン』

そんな特殊能力はない、と目で訴えてくるグレートウルフに、ラーハルトはだよね、と力なく笑う。

「……どうしよう」

状況は不明だが、とりあえずピンチだということは理解したラーハルトだった。

あくまで体感時間ではないが、ラーハルトが目覚めてから恐らく一時間ほど。どうやらこの場所に他の生き物の気配はないらしい。

内心パニックになる自分をなんとか抑えて、こんな時ツバキだったらどうするか、とラーハルトは考える。

多分、恐らく、きつと。

ツバキだったらこんな鎖くらい破壊してとつくに牢獄を脱出しているだろう、という考えは身も蓋もないため端に置いておいて。

ツバキだったらきつと、まずは状況の把握に努めるだろう。

「俺は依頼人の家に入った後の記憶がほとんどないんだけど、シシーは何か覚えてる？」

『まっこと口惜しいが、妾もすぐに気を失ってしまったのじゃ』

「そっか……俺よりも先に起きてたみたいだけど、何か気づいたことはある？」

『起きてすぐにおぬしを起こしたから、起きた時間の差はほとんどないじゃろうな』

「そっか……」

ラーハルトはグレートウルフを見る。が、シシーと違って人語を使わないグレートウルフとは言葉での意思疎通ができない。また、あくまでツバキに従魔を借りている状態でラーハルトの従魔ではないため、従魔術を使つての意思疎通もできない。

どうしたものか、とラーハルトは頭を抱える。

「とりあえず、今の状況で分かっていることは、俺達はどこかに捕まっていること。恐らく、依頼人は嘘で騙されたつてことくらいかな」

『要するに、どんな状況なのか少しも分からんつてことじゃな』

「……」

シシーがばつさりと切つて捨てる。ラーハルトは閉口してから「そうだけど、言い方」とぼやく。項垂れるラーハルトを気遣い、鼻先を寄せてくるグレートウルフの頭を撫でて、ラーハルトはよしつと腹をくくる。

「俺達をここに捕らえているのには何か理由があるはずだ。俺達が起き出す頃合いを把握しているだろうし、きつと元依頼人からの接触があると思う」

『なるほどのう』

「状況も不明だし、鎖で何もできないし……元依頼人の接触を待とう。その後のことは、後で考えよう！」

『……まあ、それが妥当じゃな』

ラーハルト達が今後の方向性を確認し頷き合ったその時、ぎい、と蝶番の軋む音がした。

「！」

次いで、カッン、カッン、とヒールが床を叩く音。

「(来たー)」

『(うむー)』

ラーハルトは小声で囁く。

「(どっ、どうしよう、こういう時ってまだ起きてないフリしてた方がいいかな?)」

『(知らんのじゃー)』

「(えー! そんなー)」

まだ気づいていないフリをして様子を窺うか、それとも正面きってどういうつもりだと問いたです方がいいのか、ラーハルトが決めかねている間に、足音がすぐそばまで近づいてきた。

ラーハルトが覚悟を決めて正面を睨みつけるのとほとんど同時に、眩しい明かりがラーハルト達がいる牢獄内へ向けられた。

「うわっ! 眩しっ!」

「起きていたか」

「!!」

ランタンを掲げているのは、あの元依頼人の大男だった。それとは別に、知らない顔が後ろに数人続いている。

ラーハルトはどきどきとうるさい心臓を押さえて、元依頼人へ向かって口を開く。

「おい! これは一体どういうつもりだ! 怪我をした魔物を保護したっていうのは嘘だったんだな!?」

ラーハルトの問いに、元依頼人はひひひ、と下卑た笑いを浮かべる。

「そんなの嘘っぱちに決まってるんだろが」

「従魔が大変なんだあ! 助けてくれえ! ……ってすこおし大げさに依頼を出ただけで疑いもせずノコノコやってきて、預かり処つつうのは随分とお人好しの集まりなんだな」

「代表だつつう女の方は凄腕らしいが、肝心の不死鳥の契約者がこんなペーペーとは、攫ってきたさいつつてるようなもんだぜ!」

「ちげえねえ! 楽な仕事だったな!」

「なっ……!」

馬鹿にしたような元依頼人達の態度に、ラーハルトはカチンときて立ち上がろうとするも、鎖が邪魔を思わずよろけてしまう。

そんなラーハルトの姿を鼻で笑った後、元依頼人が大人しくしていると凄む。

「お前は付属品だが、大事な商品だ。客に渡す時に血だらけつてのもいただけねえ」

「商品? なんのことだ!」

「決まってんだろ？ そのお綺麗な鳥と狼さ！ 珍しい魔物は趣味のいい連中に高値で売れる！」  
「……は？」

呆然としているラーハルトに構わず、まだ見ぬ金の山を想像して元依頼人は大声で笑う。  
「その鳥には、過去イチの落札額がつくだろうさ!! ははははは!!」

屈強な男達はラーハルト達それぞれに口輪をはめると牢獄から連れ出す。

逃げ出すチャンスはないものかとラーハルトは抵抗してみたが、どれも上手くはいかなかった。

どうやらラーハルトの枷には魔術封じの効果が付与されているらしい。シシーに従魔術を施そうにも従魔術が発動せず、ただ引きずられるがままにどこかに連れていかれる。

やがて着いたどこかの部屋の中には、巨大な鳥かごを模した檻おびが置かれている。

「さあ、とつと入りやがれ」

「……誰が入るか」

ラーハルトが拒否を示した瞬間、男の一人がシシーの首を締め上げる。

『ぐうっ、かつ……!!』

「シシー！ やめろ！」

「ふんっ、最初から大人しく指示に従ってればいいんだよ」

「……っ」

何もできないもどかしさに震えながら、ラーハルトは檻の中へと自ら入る。

続けてシシーとグレートウルフも中へ詰め込まれると、それぞれの鎖が檻の中の金具に繋がられる。

「喜びな。おめえらは今夜の目玉だ。オークションのフィナーレに出品だから、それまでここで大人しく待ってろ」

檻の扉を閉め鍵をかけると、男達は部屋を出ていく。

「くそっ……」

去っていく男達の背中を、ラーハルトは睨みつけることだけしかできなかった。

ラーハルト達が入られた檻が置かれている部屋は、どうやらオークション会場に近いらしい。

ここまでオークション会場の熱気が届いてくる。

『んんぬうう……っ！ なんなんじゃ口輪くわはあつ！ 喋りにくいしっ、邪魔だしっ、なんだかすつごく不快なのじゃあっ!!』

バサバサと羽根をばたつかせてシシーが暴れる。グレートウルフも檻に体当たりをしようとするが、鎖が短くほとんど身動きができずに呻いている。

「オークションなんて……はああ……どうしよう。元から数日かかる予定の依頼だったから、師匠が気づくわけないし」

ラーハルトはもしもこれが俺じゃなくツバキ師匠だったら簡単に解決しているだろうに、と再び考えて気分が沈む。

『つかー！ 腹立たしいのじゃ！ のう、ラーハルト！ なんとかならんのか!! なんとかしてほしいのじゃ!!』

「！」

ラーハルトに助けを求めるシシーを見て、ハッとする。

そうだ、ゆっくりでも、一步一步進んでいこうと決めたんだ、と。

少し冷静になった頭でラーハルトは考える。この状況をどうすれば好転させられるのか。

「ごめん、シシー。グレートウルフ。今、俺の力だけではここから脱出することができない」

『ぬう』

「ところで、俺の鎖には魔術封じの効果があるみたいなんだけど、お前達はどうだ？ なんか力が出ないとか、変な感じはある？」

『ガウツ、ガウツ』

「えーつと……」

『変な感じはないと言ってるのじゃ』

「あ、ありがと、シシー。お前はどうか？」

『ないのじゃ』

「お前達のはただの鎖か……」

『炎も出せると思うが、こんな狭いところで出したら部屋ごと丸ごと黒焦げじゃ』

「うっ、それは、ちよつと」

伝説級と呼ばれるだけあってシシーの炎は一級品だ。ただしその分威力が大き過ぎて細かいコントロールが難しい。通常ならばラーハルトが従魔術でカバーし、威力を小さくして操ることもできるが、今はラーハルトの従魔術を封じられている。

と、なると――

「脱出の機会は、むしろ俺達がオークションにかけられている時だな」

『どういうことじゃ？』

「少なくとも、この檻からは出されるはずだし、もしかしたら鎖を外す瞬間があるかもしれないあくまで希望的観測だけど、と付け足してラーハルトは続ける。

「あの元依頼人は、オークションだって言ってた。それに、とんでもない額がつくことを期待している風だったし、フィナーレだとも。そうなると、普通に出品するとは考えにくい」

『?』

「多分、俺だったら——」

ラーハルトは自身の考えをシシーとグレートウルフに伝える。

今までの経験を、シシーを、そして自分を信じて、やれることをやれるだけやってみよう、と。

◆

オークション会場の熱気と興奮は、最高潮に達している。

既に目当ての商品を落札した者は酒を飲みながらオークションをエンターテイメントとして楽しみ、今まさに欲しい商品を落札するために競い合っている者は汗が滲む手で札を握りしめている。カアアン、と小づちが小気味よい音を立てて落札を宣言する。

にこにこ随分と機嫌のよさげな司会者がマイクに向かって叫ぶ。

「さああああ！ お集りの皆々様！ ついに、ついにこの時がやってまいりました!!」

観客の視線が、一気にステージに集まる。

「我らが秘密のオークションと言えど、滅多にお目にかかれない逸品を、皆々様にご紹介できる今宵を誇りに思います！」

司会者の言葉の後に、会場の照明が落ちる。

暗闇に包まれた会場内には観客のざわめきが広がる。

そして。

「伝説の魔物の一角、死してなお灰の中から甦る炎！ 不死鳥ですツツ!!」

パツ！ と会場の照明が再び灯る。

照明と共にステージ中央に現れた巨大な鳥かごには、鮮やかな赤い羽根の鳥。

「従魔術師付きのため、どなたでも飼育可能です！ 更に今ならグレートウルフもご一緒にお付けいたします!!」

観客から歓声が上ががり、我先にと札を掲げる。

瞬く間につり上がっていく金額に、司会者は進行も忘れてごくりと生唾を飲む。

会場のボルテージが上ががり、異様とも言える雰囲気の中、ステージ上、鳥かごの中のラーハルトもまた会場の空気に気圧されかけていた。

「(大丈夫……大丈夫だ……きつと、上手くいく。俺とシシーなら……)」

上がり続けていた金額が、徐々に小刻みになってきた。

まだ落札される気配はないが、脱落者も出てきた中、ステージ袖から出てきたスタッフらしき人物が司会者に近寄り耳打ちをする。

にやり、と笑った司会者はマイクを持ち直すと「ここで注目です!!」と叫ぶ。

「まだ落札中ではありますが、今宵を特別な夜にするために、皆々様にここで一度ショーをご覧いただけます!」

司会者がそう言うと、ステージ袖から例の元依頼人が出てきて鳥かごの扉に手をかける。

そして扉を開けると、ラーハルトの枷に繋がる鎖を引き、耳打ちをする。

「おかしな真似はするなよ? お前が少しでも何かしたら、あの家畜共を殺す!」

「お前……っ!」

「狼の方はおまけだ。不死鳥はどうせ殺しても生き返るんだろ?」

ラーハルトが反論する前に、元依頼人は鎖を思いきり引くとラーハルトをステージ上に引きずり出した。

続けてシシーとグレートウルフの鎖も引いて、ラーハルトの隣に立たせる。

「それでは皆々様に実際に不死鳥の力をご覧いただきましょう!」

元依頼人がラーハルトを小突く。

「少しだけ不死鳥を操れ!」

「っ!」

元依頼人がラーハルトの足の鎖はそのままに、魔術封じの枷を外す。

「(きた、きた、きた!)」

ラーハルトは平静を装う。

「おらっ、とつとと従魔術を発動させろっ!」

ラーハルトは魔術を発動させるために力を込める。そして――

「シシー、グレートウルフ、やれっ!!」

ラーハルトは従魔術ではなく、シシーとグレートウルフの鎖に向かって斬撃の魔術を放つ。

スパッと気持ちのいい音を立てて、ふたりの鎖が途中ですっぱりと切れる。

「落札の最中に、こういうデモンストレーションをやると思ってた!」

勝利の笑みを浮かべて叫ぶラーハルト。

「なっ! てめえ……!」

元依頼人は慌てて鎖を引き寄せる、が、手元に手繰り寄せられたのはラーハルトだけ。

ならば直接と不死鳥を見れば既に会場の天井近くまで飛び上がっており、グレートウルフは口輪こそ着けられたままなのに、自由になった四肢で客席まで降りて暴れ出している。

「おい! てめえ、どういふことだ!! 従魔共は暴れねえんじやなかったのかよ!」

「し、知らねえよ! この従魔術師が勝手に!」

司会者と元依頼人が揉めている間に、客席から悲鳴が上がる。



グレートウルフが客席で暴れて椅子やら備品やらを壊し、観客達はパニックを起こして逃げ惑<sup>まど</sup>っている。

「くそっ、てめえ！ とつとあの狼を止めやがれ!!」

元依頼人がラーハルトの胸倉を掴みぎりぎりど締め上げて迫る。

「ぐっ、う……!! そ、それは無理な相談だな！」

「なに!？」

「あのグレートウルフは俺の従魔じゃない……!! 俺の従魔術では、制御は不可能だ！」

「はあ!? てめえ、聞いてねえぞそんな……っでええ!!」

ラーハルトは胸倉を掴んでいる元依頼人の足を思いきり踏み抜く。

痛みで手の力が緩んだ隙を見逃さずに元依頼人の腕を必死に振りほどくと、ラーハルトは鳥かごの中に今度は自分から入り込み扉を閉める。

「シシー！」

『妾は準備万端なのじゃっ!』

「よし！ 感覚共有だ!!」

従魔術によって、ラーハルトとシシーの感覚が共有される。

ラーハルトがぎゅっと目を閉じれば、そこには会場を上から見下ろしているシシーの視界が映る。

「づっ……」

右に左に、上に下に。物凄い速度で動く視界にラーハルトは吐き気を催すも、なんとか耐えてシシーへ指示を伝える。

「さっき言った通りに、グレートウルフが会場内をかく乱しているうちにお前は外に出ろ!!」

『任せるなのじゃーっ!』

不死鳥は炎をまとい、止めようとそこかしこから出てきたオークシヨンのスタッフを弾き飛ばし、時に障害物を破壊しながら会場の出口を探した。

そしてシシーは気合いを入れて、会場の天井にあった穴から弾丸のように飛び出す。

『かっかっかっ! 妾を止められる者なぞ、おらんのじゃあ〜!』

光線のように一直線に飛び、かと思えばくるくると舞うように飛び、急上昇に急降下。

シシーがちよっと楽しくなってきたところで、目の前には壁。回り道をするのももう面倒だし、ラーハルトのいる会場からは離れたし、もう別に多少燃やしてもいいじゃろ、とシシーは炎全開でそのまま壁に突っ込んだ。

「うろううわっ! ぎゃーっ! 前前前! おええええええ……」

鳥かごの中に籠城したラーハルトは、扉が外から開けられないように必死に押さえながら、めま

いや吐き気と必死に戦っていた。

「づっ! づづっ! づうづうづう!!」

目まぐるしく回る視界を目を閉じて見えないようにしたいのに、そもそも目を閉じている。じゃあ開けばいいかというと、今度は実際に目の前の自分の視界とシシーの視界がダブって更に酷いことになる。

「まっすぐ……まっすぐ飛んでくれえっ……!」

シシーとの感覚共有の訓練はきちんと日々行っている。

が、しかし。今ラーハルトは悟った。

「(これは、これは訓練でどうこうなるものじゃない……!)」

多分、シシーがアクロバット飛行をせずに普通に飛行したらこんなに吐き気を催さない。更にラーハルトがその場から動けなくなる、ということもなくなるはずだ。が、シシーの性格上それは無理というものである。

「てめえこら! 出てこい!!」

「うあっ! っぐ、ぐ!」

元依頼人が鳥かごの扉に手をかけて開けようと思いきり力を込めてくる。

ここでラーハルトが捕まりシシーとの感覚共有が途切れれば、外に助けを求めることもできなく

なるし、シシーを通じて状況を把握することもできなくなる。

扉を開けられるわけにはいかない、とラーハルトも負けじと扉をpushさえる手に力を込める。

「ふざけた真似しやがってこの野郎！ てめえのせいでオークションがおじゃんだ!! どうしてくれんだ!!」

「そ、もそもつ、人を騙して、拉致して、勝手に売りに出す、なっ!」

「こっちはそれで商売が成り立ってんだよ!!」

ガシャガシャ、ガシャガシャ、扉が音を立てて内へ外へ揺れ動く。

均衡していたそれはやがて、外へ大きく動き出す。

「ぐっ、ぐっ、ぐうううっ!」

やがて扉が、ゆっくりと、外へ開かれる。

「さあ、お遊びは終いだ……クソ野郎」

「うっ」

扉が外から開かれ、その勢いのままに扉を掴んでいたラーハルトも外へと転がり出る。

ラーハルトはすぐさま起き上がるが、二重になる視界に飛び込んだのは、屈強な大勢の男達に取り押さえられているグレートウルフの姿。それと、目の前で仁王立ちになり額に青筋を浮かべてラーハルトを見下ろす元依頼人。

元依頼人はラーハルトの胸倉を再び掴むと、そのまま力任せにラーハルトの体を持ち上げる。

「ああっ!」

ラーハルトのつま先は地面から浮き、苦しさで顔は真っ赤になる。そしてぷつり、とラーハルトの中で何かが切れた。

「あの鳥は後で捕まえる……が、お前はここで殺してやるからな!! 他の従魔術師だっけいくらでもいるんだから、お前にこだわる必要はねえええ……え?」

元依頼人の視界がかすむ。

「つおぼろろろろろろろ」

頭上から降ってきたラーハルトの吐瀉物によって。

「つぎゃああああああああ!!」

シシーのスーパーウルトラアクロバット飛行に堪え切れなかったラーハルトは、元依頼人に締め上げられながら、ちようど元依頼人の頭に向かって胃の中ものを吐き出した。

ラーハルトの吐瀉物を直接浴びた元依頼人はもちろん、その光景を見てしまった周りの男達もうげえ、と顔を歪めて後ずさる。

その時、会場の入り口が激しい音を立てながら開けられた。

「——っ警備隊だ!! 全員大人しく投降しろ!!」

入り口からどつと武装した警備隊がなだれ込んでくる。  
「っ!? しまった、嗅ぎつけられた!」  
「逃げる!」

「一人残らず捕らえる!! 出入口は全て封鎖だ!!」  
「どけっ! 売上持つてずらかれ!!」

一気に騒然となった会場内で、ラーハルトを捕まえていた元依頼人が突然ラーハルトの視界から消える。

「っ!？」

警備隊の一人がタツクルし、元依頼人を確保していた。

どうやら助かったようだが、一体何が起きているのだとラーハルトが呆然としていると、会場に乗り込んで一番に号令をかけていた警備隊のリーダーらしき男が声をかけてきた。

「失礼。君が、ラーハルト君かな?」

「え? あ、はい」

「私はサフィア街の警備隊長だ。我々が追っていた非合法オークションの摘発てきほつに関する協力をどうもありがとう」

「あ、はい……はい?」

身に覚えのない協力という言葉に、ラーハルトはなんのことだと聞き返す。

「こちらの賢い魔物は、君の従魔だね?」

「え? あ、シシー!!」

『ラーハルト! えへんつ、妾を褒めるのじゃっ!!』

警備隊長の片腕に乗るのは、堂々と胸を張るシシー。

「お前が助けを呼んできてくれたのか!」

『外に出たところで、近くをうろついているこやつらを連れてきたのじゃ』

シシー曰く、壁を破壊して飛び出した直後に警備隊と遭遇したらしいが、ちょうどその前後でラーハルトは吐き散らかし、元依頼人に締め上げられた衝撃やらなにやらでシシーとの感覚共有が途切れてしまっていた。

ラーハルトからのリアルタイムでの指示がなかったとはいえ、事前に取り決めていた通りに助けを見つけ、呼んできてくれたことに、ラーハルトはシシーとの意思疎通のレベルが上がっている実感を得て感動する。

「さて、まずは君の手当てもしよう。その後に少し時間をもらえるかな?」

「あ、はい!」

この後は恐らく事情聴取や取り調べを受けるのだろう。

時間はかかってしまいが、無事に預かり処に帰ることはできそうだ、とラーハルトはやつと胸を撫でおろした。



「ラーハルト、あんた、また事件に巻き込まれたんだって？」

「……ふあい」

違法オークションの騒動に巻き込まれてから丸々一週間以上。

疲れ果ててよろよろの状態で、やっとラーハルトは預かり処の玄関に戻ってきた。

先に出していた手紙で事のあらましを知っているツバキは、従魔含め無事だったことを知っているからこそ「そういう運命なのかしらね」と笑う。

「あんた、すぐに何かトラブルに巻き込まれるわね」

「……師匠には言われたくないです」

「……それもそうね」

今後は依頼内容はきちんと調べてから受けようと言いながら、ツバキは玄関に寄りかかっていた体を起こすと、さあ入って休んで、と一人と二匹に告げる。

「あ、何はともあれ、お疲れ。おかえり」

『ただいまなのじゃー!』

『ガウッ』

当たり前のようにただいまと言い、当たり前のようにおかえりと言ってくれる相手がいる。

そこに帰ってくるだけで、ほっと安心できる場所。

人だったり、家だったり、いつか預かり処で預かっている全ての従魔達が、そんな居心地のいい場所を見つげられますように。

「ただいま帰りました」

ラーハルトはそう言って玄関をくぐった。

## 第二章 理想を求めてあっちゃこっちゃえらいこっちゃ

『ふべえええつくしよおおおお!!』

随分と吹く風が冷え込んできた今日この頃。

預かり処の庭から、思わず飛び跳ねるくらいに驚くほど大きなくしゃみが響いた。

落ち葉で溢れかえっている庭の掃き掃除をしていたツバキは、ぱちぱちと目を瞬かせて固まる。

とんでもないおっさんくしゃみの音が聞こえたが、果たしてここにおっさんなどいたのだろうか。

と、音の発生源をきよるきよると探せば、一對の目と視線がかち合う。

『……』

『……』

見つめ合う目と目。

沈黙の中、先に口を開いたのは声に驚きを滲ませたツバキだった。

『……え、デュボン!?!』

『ついやああああああ!!』

『はっ!? ちょ、デュボン——!!』

光合成をしていたドリアドのデュボンは、ずぼりと鉢植えの中から根っこを引き抜き、脱兎のごとくその場から逃げ出した。

しかし体の大きさ的にも、あくまで根っこを足のようにして動かしているという事実に、ツバキが追いかければデュボンにすぐに追いつく。

「ちよつとちよつと、あんたどうしたのよ!?!」

『ぜいっ、ぜいっ……はああああんっ!』

「えっ、何っ?！」

地面によよよ、と横たわり荒い呼吸を繰り返すデュボンの葉は、しおしおとしおれて項垂れている。

『ああっ……地面さえもこの美しいボクを引き留めたがる……っ』

「いや、あんたが走るのに向いてない体なだけでしょ」

『ヴィーナス……っ!』

ツバキはひとまずデュボンを持ち上げてやると、葉についた土をぱっぱと払ってやる。

「突然走り出したりして、どうしたのよ」

『づっ! だって、だって……! ヴィーナス! 君は聴いてしまったのだろうか?! このボクらし

からぬ、そうつまり、美しくなく可憐かれんさもなく、奥ゆかしさもない、あたかもこのボクの声帯を悪魔が乗っ取りたもう嘆なげきの叫びを……!」

「あんたが何を言っているのかまったく分からない」

デュポンは顔を真っ赤にして震えると、わっ! と泣き出した。

『このボクがあんなとんでもないおっさんのようなくしゃみをするなんて恥はずかしすぎるううううっ!!』

「……ああ、そう」

おいおいとこの世の終わりのようにむせび泣くデュポンにたかだかそんなことで……と呆だまれているツバキだったが、ふとデュポンの頬がやけに赤く、また鼻水が出ているのに気づく。

「あれ? あんた、もしかしてちよつと具合悪い?」

『んあえ?』

デュポンははずずつと鼻をすする。そしてしばらく顎に手を当て考え込む。

『……そういえばなんだか若干ちよつぴり葉の艶つやがよくないかもしれなっ!』

「ちよつとこつち見て」

『んあいつ』

ツバキはデュポンをまじまじと見つめ、その額や葉の表面を触る。

「うーん……ちよつと風邪のひき始めつぽいかな」

『ああつ、ウィルスさえも惹ひきつけてしまうボクの美しさよっ』

「最近寒くなってきたし、植物系の魔物のあんたにはそろそろ外はきついかもね」

『紅葉の葉の降り注ぐ中や、純白の雪に埋もれるボクもまた美しい……がつ! やはりボクは生命溢れる色鮮やかな春の女神の子……秋の風がボクに嫉妬してしまっただね……っ』

「とりあえず中入って温かくして、鉢植えに植物系魔物用の栄養剤を打つとくか」

会話をしているようでその実、成り立っていない会話の壁打ちをしつつツバキはデュポンを手に乗せたまま預かり処の中へと入っていった。

「あー、あつたあつた」

従魔用の薬箱の中をごそごそとあさって目当ての物を見つけたツバキは、それを持って預かり処のリビングへと向かう。

リビングのテーブル上に置かれた鉢植えの中に根っこを戻したデュポンは、その土の上に上半身を倒している。

「はい。栄養じ剤を打ってしばらく安静にして。いい? 安静によ。安静についてるのは、動かないで、お喋りもなし。いい!?!」